

レアメタル回収にも活用

遠心分離機メーカーの齋藤遠心機工業（東京都大田区、齋藤光生社長、03・3743・1116）は、レアメタル（希少金属）のリサイクルなど、環境分野に事業を横展開している。1941年の創業以来、76年にわたって遠心分離一筋で技術ノウハウを培い、主に果汁や豆乳などの食品向けに事業を行ってきた。近年では、経験に裏打ちされた要求対応力が評価され、異分野からの相談件数も増えている。齋藤社長に今後の見通しなどを聞いた。

（南東京支局長・安久井建市）

「横型の遠心分離機の1種であるスクリーデカンターを開発しました。」

「円筒形と円錐形を組み合わせた『中空回転体』と『スクリー』の回転で発生する重力の3000倍の遠心力で、固形物と液体を分離する。外注活用による精密加工のほか、回転体の心分離機による5割（マ

「具体的には。」

「中空回転体の内径とスクリーの外径の間を、精密加工によって極力小さくして、微粒子の回収率を高める。同時に、処理能力も向上させた。例えば、遠心分離機による5割（マ

「機械の納入先は、果汁

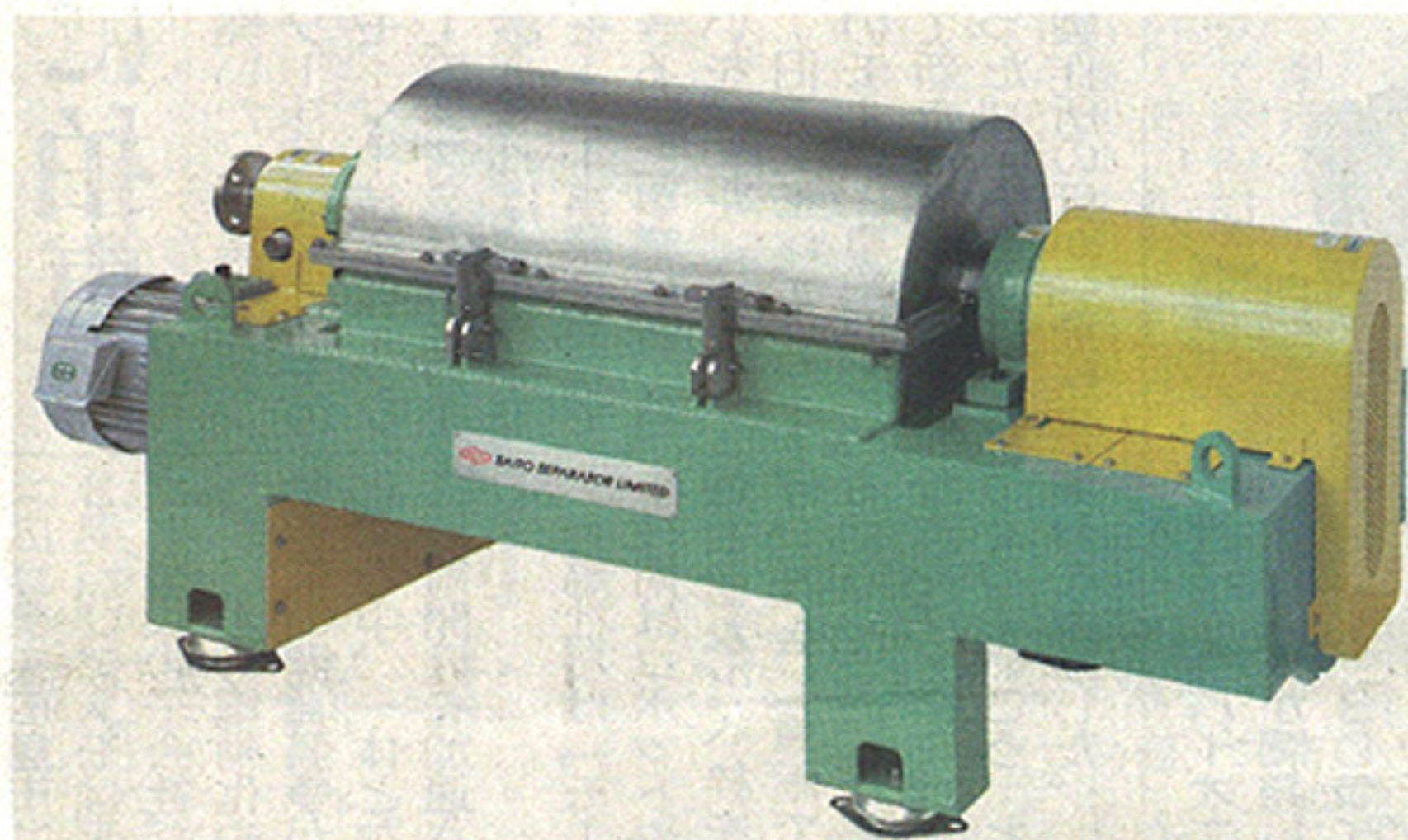
遠心分離機

市場をつくる



齋藤遠心機工業社長
齋藤 光生 氏

10ミクロン以下 微粒子対応



や豆乳など食品向けがメイン。用途開発にも注力し、自然エネルギーやリサイクル、医療向けも視野に入れている。アルミニウムなどの微粒子やレアメタル回収にも使われている。ガラス表面を磨く際に使う研磨剤にレアメタルが含まれているが、研磨後に排出される水溶液中のレアメタルを遠心分離で回収する。

「需要先から相談を受けることが多い。当社は『立型』と『横型』の両方の遠心分離機を手がけているため、要求への対応力がある。需要先は、何に使うのかについて明らかにしないが、指定された条件を基に、当社で実験してできると考えた。固形物の寸法は10ミクロンが限界で、それ以下の微粒子は分離できないとされていたが、当社で培った経験とノウハウで実現した」

「海外企業との競争も懸念されず。齋藤遠心機が開発したスクリーデカンター

「日本市場に関しては、中国などの海外企業の遠心分離機は、今のところ入っていない。遠心分離機を必要とするのは食品や精密機器業界のため、需要先がリスクを取らないのだと思う。生産ラインが止まると、損失が大きいとみているのだろうか」

用途開発で競合と差別化

クイックポイント

遠心分離機は食品業界のほか、地方自治体の排水処理など公共事業向けがメインのため、それほどの浮き沈みはないという。競合メーカーは5社あり、そのうち上場企業は2社。齋藤遠心機は食品向けを主に年間50台、多いときで60-70台を出荷する。景気低迷時には大手が食品向けに力を入れてくるため、それなりに競争は激しくなる。今後は精密機器やリサイクル向けをはじめとした用途開発がカギになりそう。